

「文化」の理論と実践——キューバの二つの事例から考える

岩 村 健二郎

はじめに

駒村圭吾は国籍をはじめとする実定法秩序としての法的身分と、実定法的規制体系としての権利義務の二つを「自由な社会の秩序」としながら、より「日常のかつ強固に影響力を持ち、実定法によらずとも各人に内面化され規律化された秩序があ」り、それこそはクリフォード・ギアーツが指摘した“意味の網”＝「文化」だと言う。

「意味の秩序は法制度が所管する領域ではない。少なくとも従来の憲法学はそうのように考えてきた。上記引用において、ギアーツの「意味の網」を「文化」とおいたが、文化こそは国家ないし法制度から距離をおく自律領域と想定されてきた。（改行）が、同時に、国家ないし法制度が文化にただならぬ関心を抱いてきたこともまた事実である。その核心的な理由は、文化が意味秩序である以上、文化を掌握すれば意味秩序を操作することが可能になり、国民をその内面において支配することができるようになるからである。文化≡意味秩序は法制度から距離をおくべきであるという前提があるからこそ、それとない方法を用いて文化を管理・支配することが、制度的諸条件を気にせずに、効率的かつ有効な統治の技法となり得ることを国家はよく知っているのである。なるほど、国家が「文化国家（Kulturstaat）」を標榜するのは、文化が名声や富、果てには自己顕示にも直結するからであるが、それ以上に、統治の技法としての文化支配がとても魅力的であるからである。」

(駒村 2018: 12-23)

文化と「国家ないし法制度」の関係として述べていることを、文化と権力の二項関係に直接言い換えることは簡単ではないだろうが、権力が魅力的に感じる「統治の技法としての文化支配」と逆のベクトルとして、「自律領域」としての文化が権力と結ぶ対抗関係、文化が権力に対して持つ、そして持とうとする自律性について想像するのは難しくないだろう。当然その時の「文化」＝“意味の網”は、固定化された内部を持つ静態的なものではなく、言語の「行為体」としての力の作用によって動態的な可変性を持っているものとして前提されているのであり、言葉によって構築される意味の秩序は、権力の関与によって操作される可能性を持つ「だけ」ではなく、反復の凝集である言葉＝行為体の、行為遂行性を解放させる「対抗的発話」によって、「違った意味を持ち得る」可能性をも持つ。こうしたことを、ジュディス・バトラーはオースチンの言語行為論を発展させるなかで、憎悪表現とその意味作用への「対抗」の中で構想したのだった。上記の駒村の議論はバトラーの理論を「意味の秩序に対する“権力”の関与が問題になった近似の例」としてドナルド・トランプと天皇のナラティブ分析へと敷衍させていくが、ここでは逆に、それを権力と対峙する対抗的発話の中に検証できないかを考えてみたい。

1 『キューバ・リブレ ラップで闘う』

2018年8月10日（金）、NHKBSで「世界のドキュメンタリー シリーズ『キューバ・リブレ ラップで闘う』」が放送された。以下はウェブ上の番組案内である。

「アルドとビアン」の2人は、CDを手作りして街頭で配り、秘密のゲリラ公演を地方の町で開くなどして音楽活動が続けている。カリブのこの国の住

民なら誰もが知る存在だが「固定観念を打ち破れ」と呼びかける彼らのラップを聴いていた一家が長期の拘束を受けるなど、当局の厳しい圧力に直面している。ビアンと妻の間にも初めての子が…“理由ある反抗”は続けられるのか？ キューバの断面を鋭く切り取った歌と生きざまのドキュメント。」(NHKBS 2018)

「rap の原点だと思った。世の中の不平不満を rap する」という「視聴者の声」や、「秘密のゲリラ公演」「当局の厳しい圧力」「理由ある反抗」は、例えば「ヒップホップ文化は反体制的、反逆的な要素を持つストリート文化」であるとか、「困難を乗り越えていくために、その暴力的、破壊的なエネルギーを少しでもクリエイティブな方向に持っていくために必要な文化的価値も有していた」(有閑 2018: 44) といった日本で受容されたヒップホップが持つ一般的イメージに概ねよりそっているといえるだろう。今回日本でこうしたイメージで、ある「キューバの文化」が受容されているのは、一つには「ラップ」や「ヒップホップ文化」という記号が持ちえたイメージのためであろう。また、「当局の圧力」という表現には、「弾圧」「検閲」といった「社会主義国家の全体主義による自由のはく奪」といったようなイメージが背後にあるのかもしれない。いずれこれらが一種のステレオタイプなのかどうか、「実際」と乖離しているのかどうかは一旦棚上げして、このドキュメンタリーで映され、表現されている「アルドとビアン」の「ラップ」を取り囲んでいる状況についてまずは考えてみたい。

このドキュメンタリーは米国の「パシオン社」製作で、メキシコ人のジェシー・アセバドとキューバ人のシルビート“エル・リブレ”の二人の共同監督によって2015年に制作された。その前年2014年4月3日、AP通信は冒頭で以下のように説明されている文書を公開した。

「米国国際開発庁 (USAID) のエージェントによって使われた組織と銀行

口座の詳細。目的はキューバのヒップホップへの潜入計画である。これらの書類は、USAID の秘密裏の作戦を裏付けている。それはキューバのアンダーグラウンドのヒップホップ・ムーブメントに侵入することだ。この計画は、現状を望まないラッパーたちに、政府に反対する若者の運動を起こさせようとするものだった。」(AP 通信 2014)

その四日後、CUBADEBATE. CU⁽¹⁾ は、「米国はキューバの政権交代のためにラッパーたちを利用した：AP 調査」(CUBADEBATE 2014) と題する記事を掲載した。そこでは、「米国政府のエージェントが、ある音楽プロモーターをキューバに派遣したが、その使命はハバナの最も名の知れたラッパーたちの一人を勧誘し、キューバ政府に反対する若者のムーブメントを際立たせることだった」として、様々な米国の「陰謀」を糾弾している。例えば、USAID による「ツイッター工作」(“スンスネオ”という国内ネットワークを構築し、ユーザーに反政府情報を共有させるもの)や、米政府が USAID を通して出資する「世界中のポジティブな変革の実現を望む人々のサポート」を目的とするクリエイティブ・アソシエイツ・インターナショナル社が、キューバ人のビデオ・プロデューサー、アドリアン・モンソンを雇い、「社会的な意識の強い若者アーティスト200人」をリストアップし、TalentoCubano.net というウェブサイト⁽²⁾に掲載し、「社会運動」を画策する計画と実行のほか、2009年よりは、2000年のユーゴスラビア連邦大統領選挙でのスボロダン・ミロシェビッチ退陣における「ブルドーザー革命」のデモ活動の一つとして始まったセルビアの「EXIT フェスティバル」の主催者であるセルビア人の「音楽プロモーター」ラジコ・ボジックをクリエイティブ・アソシエイツ・インターナショナル社により雇い、「島内のヒップホップ・、ムーブメントを掌握して、キューバの若者層に情報の壁を破るよう助け、社会変化のための若者のネットワークを形成」することを目的として活動させた具体的な動きをレポート、批判している。

一方、USAID の監察総監室が行った「USAID によるキューバ市民社会支援計画」の監査報告書（Office of Inspector General 2015）にはこうある。1992年の「キューバ民主化法」（トリチェリ法）以降の「カストロの専制の終焉を早めるためにキューバ国民のエンパワーメントを援助する」活動の延長として、2008年に USAID への予算投下を議会は通知し、USAID は「キューバ市民社会支援計画」を策定、クリエイティブ・アソシエイツ・インターナショナル社に当初3年に対し1600万ドルの予算を払い、「キューバに政府から独立した市民社会を広げる活動を支援」することになった。「計画のゴール」は「民主的变化のための環境醸成」、「計画の目的」は「民間で自己決定するプロセスに積極的に参加できるよう市民をエンパワーする」、そのために「同じ目的を求める集団を組織」「マスコミュニケーションのための既存と異なる手段を作る」「安全な、物理的集会場所を作る」、「活動の目的」は、「社会的なリーダーとなる者の出現を促す」「社会活動に関与するコミュニティを増やす」「生まれようとしている社会集団とネットワークの力を高める」としている。

監査報告書には、多岐にわたる資金の譲渡先、様々な国籍の請負会社も明記されているが、コスタリカの NGO 団体、「フンダシオン・オペラシオン・ガヤ・インターナショナル」には「共同体への若者の関与を支援する」資金として2万ドルが渡され、その“一部”はキューバでの「HIV 予防ワークショップに使われた」とされている。

一方例えば上記の NGO 団体「フンダシオン・オペラシオン・ガヤ・インターナショナル」は、「当 NGO が関わった若者は、彼らの共同体の改善を、音楽でやろうとするもの、リサイクリングでやろうとするもの、ダンスでやろうとする者たちだ。彼ら個人は彼らの共同体の包括的な人間成長の助長者であり、それはラウル・カストロが彼の市民に望んでいることだ。彼らはすべての問題を政府が解決するのを待つのをやめ、彼らの共同体の変革を助長する立役者になった。だから、それらの若者を反革命であると非難するのは

間違っている。」(フンダシオン・オペラシオン・ガヤ・インターナショナル 2014) として、AP の報道への反論を現在も掲載している。

また監査報告書では、AP 通信社のレポートに対しては、「2014年4月 AP は、スンスネオは不安を煽るために秘密裏に作られたとする立場の記事を出し、計画の合法性と秘匿性についての懸念を喧伝した。2014年8月 HIV 防止ワークショップを採り上げ、ワークショップが若いキューバ人を反政府活動に勧誘する目的だったとして、世界における USAID の保健活動への不信を広めた。」としている。

スンスネオ計画の「戦略」には、セルビアの反ミロシェビッチ体制運動参加者の一部が作った「非暴力的抵抗運動」支援のための NGO、CANVAS (Center for Applied Nonviolent Action and Strategies) が作った (とクリエイティブ・アソシエイツ・インターナショナル社の主幹が報告するところの)「社会運動と紛争解決の実践者が様々な社会セクターと現状の間にある関係を理解し図式化するためのツール」として、「効果的な変化のための可能性で分類したキューバ人の構成」として「1、明確な愛国者—公安、軍、警察」「2、受け身の愛国者—教員など現状に生活が依存しているもの」「3、中立—独立営業者」「4、受け身の非愛国者—アーティスト、知識人、ブロガー」「5、明確な非愛国者—民主化運動者、反政府活動家」と分け、「2」から「4」を「共同体における生活状況を改善するために前向きになるよう支援する」としている。(Office of Inspector General 2015)

「スンスネオ計画の実行」では、その経緯が詳細に報告されている。デンバーにある携帯サービス会社「モバイル・アコード社」⁽³⁾は、2010年7月から一か月の業務を20万ドルで請負い、「キューバ人に興味を同じくするグループを作る手段を提供し、テクノロジーを使って活動をコーディネートするコミュニケーションのための場を広げる」活動のために、スンスネオを「テキスト・メッセージ、email ニュースレター、Facebook ページ、ツイッターアカウントとウェブサイトを含めた多面コミュニケーションサイト」に

した。「モバイル・アコード社は、キューバ政府が米国政府の関与を見つけ、プログラムを削除するリスクについて述べていた。彼らは痕跡を消すためにスペインにサーバを置くことを考えたが、予算を超えたので断念し、代わりにアマゾン・クラウドにスペースを借りた。そのサーバはアイルランドにあった。」(Office of Inspector General 2015)などと記載されている。

セルビア人の「音楽プロモーター」ラジコ・ボジックは、AP 文書においてコンサルティング会社 SALIDA のコンサルタントとして登場する。AP が入手した自身の報告書において彼は、「当該場所での助成金投下のための戦略上のタイミングとエリア」として

「ヒップホップ・シーンは助成金投下のためのより高い可能性を持った領域として成長しつつある。政府はアーティストに敵対するのを避ける一方、プロデューサーを妨害しながら、反体制の意見にある程度空間を残している。しかしこの反体制の意見はほとんど独占的にアートシーンの人間しか手にできない。ヒップホップ・シーンは唯一マス・カルチャーであり（かつ増大しつつある）、明確な反体制のメッセージがあり、背景にアンダーグラウンド社会の拡大があり、重要性が高い。私の見方では、キューバ政府の戦略とは、反体制を“エリートのこと”にとどめ置き、民衆を静かにしながら、同時に表現の自由があるという幻想を育てることだ。また、政府はサルサやレゲトンなどの“安全な”ポピュラー・カルチャーを押し付けている。ヒップホップは最も“意識の高い”ポップ・カルチャーの形式であろうし、おそらく最も活力がある。政府の危険を察知する能力を過小評価してはいけない。彼らは自分たちのラップ局を作った。しかしそうした官僚的な形式によって若者のムーブメントを強奪することはできない。最近の二件のヒップホッパーの規制は、多くの若いキューバ人の前で起き、ヒップホップ・シーンは非常に破壊的になってきている。が、同時にそこで活動するのは危険なほどではない。検閲に対峙すべく人を集めることでヒップホップは大きな力を得た。加

えて、ヒップホップは高度に国際的で、世界中のヒップホッパーをつなげることができる。ヒップホップ・シーンはこれまで長くカストロ派だったラテンアメリカの社会環境の多くに、初めて浸透していくことになるだろう。そのためラテンのラッパーに投資することも大きなポテンシャルとなるであろう。」(AP 通信 2014)

とした上で、「アルドとアドリアンと打合せた」と報告している。

小出は、主に米国とイギリスのカウンター・カルチャーとポピュラーカルチャーの相関について音楽表現を対象に述べる中で、「社会に反抗し、体制批判をおこなう表現手段として発現したサブカルチャーが、やがてポップカルチャーに変容し」(小出 2002) 資本に回収されていく様に、「近代資本主義生産様式が生み出した科学技術の発展」や「巨大文化資本のマーケット」の存在を指摘している。その中で、ヒップホップの「ムーブメント」を「八〇年代は、ブラックパワー・ナショナリズムを高揚させるための先導的な音楽として再認識された。それはまた社会運動や政治運動に連動して強いメッセージ性を持つリリックスとジャズやリズム&ブルースといった正統派黒人音楽のブレイク・ビーツやフックを引用するハード・コア路線スタイルであった。」(小出 2002) とも述べている。USAID の「キューバ市民社会支援計画」の実行が、「カストロの専制の終焉を早める」という米国家の対外戦略から出発して、他国の、「政府から独立した市民社会を広げる活動を支援」するために、物量作戦ともいえる多額の件費を拠出して「受け身の非愛国者—アーティスト、知識人、ブロガー」を分類、標的化し、「民主化ドミノ」を地で演じるがごとく、「大群衆の街頭での抗議行動」による「社会運動」の知をセルビアから移植し、「ヒップホップ・シーンは唯一のマス・カルチャーであり」「反体制の明確なメッセージがあり、背景にアンダーグラウンド社会の拡大があり重要性が高い」とアナライズさせて、「助成金投下のための高い可能性」を持っていると申請させ、アーティスト個人へ

の援助を実行した、ということになるうか。

この権力の網の凝集点とも言えるラジコ・ボジックのアルドへの行為だが、とりわけその報告書におけるキューバの「ヒップホップ・シーン」の分析、文化の解釈には注目すべき点がある。ボジックは先に挙げた AP 文書における報告書で「ヒップホップ・シーンはマス・カルチャー」と主張している。「ヒップホップ・シーン」については、「本場」の米国のヒップ・ホップ・シーンを想定するとすれば、ヒップ・ホップがマス・カルチャーであり、大衆主義、そして一部「拝金主義」であるのは、長く経済的な搾取と文化的搾取という二重の搾取を受けてきた「ブラック・ミュージック」がとった「戦略」、「徹底的に商品化をすすめ、実際にビジネスとして成功することを通じて偏見を突破するという方法」の結果であるとして分析する例もある（毛利 2007）。一方キューバの「ヒップホップ・シーン」にとっては、少なくともその社会における「文化産業」のあり方、さらには「産業」のあり方も異なり、資本との対峙、資本に対する抵抗運動のモーメントも（米国と同じようには）存在せず、「商品化による成功によって偏見を突破する」というようなモチベーションも厳密には、とりわけ国内的には認めにくい。いずれにしろ、そうした異なる状況、シーンを前にして、「マス・カルチャー」であるとボジックは主張したのだった。オバマ政権において国務長官だったヒラリー・クリントンが宣言したスマート・パワー政策（新藤 2018）が、こうした「巨大文化資本のマーケット」がなく「資本」に回収されることのないキューバのヒップホップ「ムーブメント」をターゲットにし、「変革の実現を望む人々のサポート」の機関である USAID を舞台に、キューバの「反体制芸術」の力を利用しようとした、というのが外形的事実ということになるうか。

ところで米国政府の戦略を具現化させるべくキューバでアルドと関わったボジックも、革命の使命に基づいて表現活動を考えるキューバ政府も、ラップがある種の行動（「反体制」の行動）を「扇動する」と想定している。こ

の意味ではどちらも、ラップという表現行為が「行為遂行的」であり、「発話媒介行為」の効果を持つと認めているのである。だからこそキューバ政府はある種の表現規制を行おうとするのであり、ボジックは「ヒップ・ホップ」というキューバの「若者のムーブメント」に「助成金投下」を申請し、さらには政府によるその規制が反発を生み「破壊的」力を助長すると報告してもいる。しかし、まったく別の文脈ではあるが、バトラーは憎悪表現の発話行為を中傷そのものとみなす見方が、憎悪表現を問題化する「進歩的な法制度化運動や社会運動によって編み出されたはずの戦略」と一致してしまい、「国家権力をその件にして拡大させることになり、その結果当の運動に不利になる危険性」について説く際に、そもそも「どの言葉も人を傷つける言葉になりうるし、それは言葉の配備次第」でありながら、必ずしもそこに収斂できるものではないし、こうしたことを考えても、「なぜある種の言葉がそのように人を傷つけるのか、その種の言葉が行使すると思われる力を説明することはできない」（バトラー 2004：21-22）としている。つまり、発話の行為遂行性の結果を説明すること、「はたらきかけ」を「発話」から、発話の効果を発話から分析して証明することは難しいと言っている。

ボジックからアルドが与えられた「言説戦略」はあったのだろうか。監査報告書、AP 文書から読めることは、複数回にわたるミーティング、コンサート同行（2009年5月、6月）、コロンビア人歌手ファネスのコンサートを企画し、ステージにアルデアーノスを上げて名声を得させる作戦（2009年9月、失敗）、また、アンダーグラウンドなテレビ番組を作り流通させること（失敗）、その後2010年7月から4か月に渡りセルビアのEXIT フェスティバルへの出演を含めコロンビア、グレナダ、スペイン、マイアミで演奏旅行をさせること、などであり、文面から暗示させるような記述もない。なお、キューバのラウル・カポーテは二重スパイとして「CIAのエージェント」となり、CIA 側からテープを渡された中から2曲ロス・アルデアーノスが採用したと主張しているが、詳細は不明である（Capote 2017）。

米国政府の対キューバ政策「キューバ民主化法（トリチェリ法）」から連なってボジックにいたる力の投下は、「専制の終焉を早める」全体目的を達成しなかった。ではボジックが目指していた作戦の「効果」を計る方法はあるだろうか。監査報告書は、「キューバ市民社会支援計画」が「国家安全保障法で定義されるような諜報作戦を含んでいたか判断する作業は行わなかった」が、計画の「資金源や受取人を隠す手法は潜在的な危険をはらんでいる」と評価している。つまりは財務監査から浮かび上がる諜報作戦の存在の蓋然性を認めているのである。しかし当然そこにはボジックの作戦関与も具体的な結果の評価も書かれていない。

ボジックがアルドと接触を持っていた期間において、おそらく最も「活力のある」「破壊的な」「見え方」をした場面は、2010年8月のロティージャ・フェスティバルへの出演時かと思われる（新藤 2018 及び Los Aldeanos 2011）。ロティージャ・フェスティバルは1998年よりマヤベケ州のヒバコア・ビーチで行われた野外フェスティバルで、いわゆる「ニューレイヴ」や「エロクトロニコ」と呼ばれる音楽潮流の流れをくみ、「インデペンデント」で開始されたが、この2010年を最後に、翌年からは「ヒバコアの夏」として州とキューバ音楽協会の主催として続けられている。

2010年のロティージャ・フェスティバルでの、バックトラックのない「演説」に始まるライブ・アクト（Los Aldeanos 2011）などより、2009年の『Mi hermosa Habana』の方が、修辭的技法や言葉のモンタージュ、文脈の置き換えなど、発話は練られているように見える。『Mi hermosa Habana』は、バックトラックにロス・サフィーロスの『Hermosa Habana』を使っている。EcuRed⁽⁴⁾によれば、ロス・サフィーロスは、「1961年結成のハーモニー・ヴォーカルグループで、「フィーリン」の運動として知られる潮流に属し、キューバのボレロなどのリズムに、ドゥーワップ、バラード、カリプソ、ボサノバ、ロックなどを取り入れて曲を作ったが、50年代のプラターズなどのアメリカのヴォーカルグループに影響を受けていた」（EcuRed

n.d.)。『Mi hermosa Habana』のプロモーションビデオの最初の映像で観られる風景は革命前のハバナの様子であり、そこに同時期の「アメリカの音楽に影響を受けたキューバのポピュラー音楽」が重ねられている。その「麗しのハバナ」は、ハバナの「美しさ」「海」「空」などの風景、「平和のシンボルのハト」「栄光のハバナ」といった叙景的な歌詞であり、その一節が聴こえながら「革命前のハバナ」と解説され、その後アルドの「mi 私の」「麗しのハバナ」のリリックが始まる。ロス・サフィーロスの原曲に想起される「過去」の豊かで美しいハバナに、現代のそれを対比させる演出は明らかな。そして貧富、拝金主義、困難な経済状況、観光化による外国人優遇、性、売春、道德腐敗、警察、官僚主義、機会・収入の不均等、インフラの不足、などについてのラップが続くが、一連の「過激な」現状批判に、革命後にオフィシャルな言説で繰り返されてきたフレーズが織り込まれている。例えば

Así es mi Habana, humana, solidaria y comunista

これが私のハバナ、人間味ある、団結した、コミュニストの

Mi Habana cederista, revolucionario y fiel

革命防衛委員会の、革命主義者の、誠実な私のハバナ

Mi Habana donde los infantes desde la cuna gozan de educación gratuita de vacuna

幼児が揺りかごの時から無償の教育、予防接種が受けられる私のハバナ

ella es la que marcha cada primero de mayo

毎年5月1日に行進する

enemiga del imperialismo y de la explotación

帝国主義と搾取の敵

などである。キューバ革命という大きな物語が支配的に語られるときの表現を、現状批判のナラティブの中で再配置、再文脈化していると言えるだろう。

最後に、ベニー・モレ、ボロ・モンタニェス、ボラ・デ・ニエベ、ロス・サフィーロス、ラス・デ・アイダ、ロス・バン・バン、トリオ・マタモロス、セリア・クルス、ウィリー・チリーノ、イサック・デルガード、メディコ・デ・ラ・サルサなどの革命前から現在までキューバ内外で活動するアーティストの名を召喚し、自らのグループ名をそこに配置、「全てのキューバ人たちの本当のハバナ」としている。

またそもそもドキュメンタリーの原題になっている『Viva Cuba Libre, Rap es la guerra』の「Viva Cuba Libre」とは彼らが2010年のロティージャ・フェスティバルでも歌った曲であり、この「Viva Cuba Libre」というフレーズこそは、独立戦争時の様々な局面、共和国期の様々な反政府運動、7月26日運動のステイトメント、59年以降の革命政府のスローガン、そして反キューバ演説をするアメリカ大統領の発言においてまで、発話者と発話のアドレス先を無数に変えながら綿々と唱えられてきたものだ。なお、2019年現在インターネットのGoogle 検索という空間で Viva Cuba Libre という語のヘゲモニーを得ているのはロス・アルデアーノスのそれである。

最後に、ロス・アルデアーノスの発話の「効果」と言えそうな現象を挿話として紹介したい。キューバのホセ・マルティ国立図書館は2018年11月、「キューバのヒップホップの第一回アーカイブ展覧会」を催した。企画を立て実行したのは同図書館の専門員であるアレハンドロ・サモーラとホセ・ルイス・モンテシノスである。筆者が訪れた同「展覧会」で、ロス・アルデアーノスのCD 作品も展示され、「キューバのヒップホップ」運動の歴史の一端に配置されていた。サモーラによれば、USAID とアルドやシルビートの関わりについては「当然のように」既知であり、その「事件」を含め、「キューバのヒップホップの歴史は構成されている」と語った（サモーラ、ホセ・マルティ国立図書館、2019年2月7日）。この展示も、こうした行為自体も、れっきとした文化的表現行為であることを考えれば、ロス・アルデアーノスの発話行為がサモーラによる「キューバのヒップホップ」の

「歴史構成」において持ち得た意義について、さらなる考察が可能であろう。サモラとモンテシノスは、キューバのヒップ・ホップの「運動」の展示を、「軌跡」として系統立てることはせず、CD、チラシ、パンフレット、雑誌、ビデオ、ステッカー、カセットなどをそれぞればらばらの断片として展示していた。付言すれば、この点だけでも、国立図書館で行われたそれは、反体制の表現の体制への回収であるとか、抵抗の語りを国民の語りへ包摂する表現行為などとは異なる、自律的な表現行為の可能性について考えさせられる、非常に啓発的な展示であった。

2 無名の死者の顕彰

1871年11月25日、ハバナ大学医学部の学生8名が、スペイン人ジャーナリスト、ゴンサロ・カスタニョンの墓を荒らしたかどで逮捕され、27日、戦時評議会によって死刑が宣告され即日銃殺された。ホセ・マルティが「1871年11月27日に死んだ兄弟たちに」という詩を捧げたこの事件は、独立戦争の最中に起きたキューバ人の「悲劇」として同時代に広く喧伝されたが、現在の「革命」キューバにおいても同日は国家追悼日であり、毎年プンタ要塞の向かいに建てられた記念碑へ向けてパレードがなされ、大掛かりな追悼式典が行われている。

1998年、作家のセラフィン・タト・キニョーネスが、雑誌『ラ・ガセタ・デ・クーバ』に「1871年11月27日の出来事における歴史と言ひ伝え」という小論を発表した。そこでは、いくつかの歴史資料に残る痕跡や蓋然性と、「口承」によって、11月27日の銃殺刑の直前に無名の有色人の男たちによって武装抵抗が行われ、多くはボルンタリオス（スペイン人民兵）による銃か銃剣により命を落としたという「知られていない事実」が検証されている。そしてどうやらそれらの有色人たちは、銃殺された学生の一人が、「アバクア」のポテンシア（結社）の一つである Bakokó Efó のメンバーだったために、彼を救出もしくは抗議しようと立ち上がった5人の「アバクア」の構成

員だった、というものだ。

「アバクア」についてキニョーネスによれば、

「奴隷となったアフリカ人は、強制的に移動させられ、永久に失われた祖国への郷愁と共に、自らの記憶以外のものを持ち込めなかった。記憶には、儀式、歌唱、舞踏、呪術、神話、言語があり、それらは後にスペインが我々に遺贈した様々な文化と混ざり合い、キューバに特別なものを生み、国家、文化となったのだ。宗教的なものは、奴隷貿易が続く間、様々なアフリカの異なる集団の文化が相互に影響を与えながら習合的な信仰を形成したが、なかでもヨルバ族からはレグラ・デ・オチャまたはサンテリーア、バントゥー族からはレグラ・デ・パロもしくはパロ・モンテが生まれた。そしてアバクアもしくはニャニゴと呼ばれるものは秘密結社であり、男性のみの相互扶助のための義兄弟組織で、ハバナ、マタンサス、カルデナスの街や港湾で100年以上継承されてきた。起源は“カラバリ”であり、それは現在のナイジェリア共和国南東部に住む人々の総体で(...)それは民俗学的に大変特異な特徴を持ち、アフリカ以外では、キューバのみでみられるものだ。」(Quiñones 1994: 13-14)

この19世紀にキューバで結成されたアフリカ起源の互助組織「アバクア」のメンバーが、結社の「義兄弟」の悲劇に立ち上がり植民地のスペイン人民兵の力によって殺された、それが「知られていない事実」ということになる。キニョーネスは小論を「私がこの小論をものしたのは、あの医学生たちを悼む127年目の今年、なんらかの形でプンタの記念碑に、(...)あの顔も名も知られぬ五人の英雄の黒人たちに、一輪の花を捧げてほしいからだ」(Quiñones 1998: 26)と結んでいる。

その8年後の2006年、高等芸術学院の教授であるマリオ・カスティージョが、キニョーネスの「目的」を受けてある行動を起こした。それはカス

ティージョによれば（カスティージョ、高等芸術学院、2018年11月21日）以下のような経緯だ。2006年9月、カスティージョら「アイデエ・サンタマリア講座」に学ぶ4人の若者、「二人のネグロと一人のルビオ、そして一人のムラート（カスティージョ）」が、キニョーネスの要請に応じて追悼行為を計画する。「我々は革命が進行中の一つの社会の枠内において、その行為が正義に基づく革命的なものであると確信し」「許可を待たずに」実行、「グランマ号のモニュメントの向かいの公園の壁」、無名の死者の一人が倒れたとされる場所に、グラフィック作品を展示した。（Castillo 2008）

彼らは事前にキニョーネスの呼びかけに自分たちがなぜ呼応するのか議論した。一人は「黒人男性の名誉を回復する」としたが、「このことを“黒人のこと”にはできないというコンセンサスを得た」という。キニョーネスによって指摘された1871年の事実、1961年にエルネスト・ゲバラの演説によってはじめて公に取り上げられた。すなわち「革命の語り」においてはじめて、そして一度だけ言及された。その後90年代終わりに、法廷で医学生たちを弁護したスペイン人役人である Federico Capdevilla の記念碑が革命政府により建てられたが、この時も彼らのことは語られなかった。1998年にタト・キニョーネスが言及し、「歴史的正義」を回復しようと呼びかけたが、さらに8年間、自らの行為まで忘却は続いた、とカスティージョは整理する。

「私たちの前にあるのは、カピトリオやハバナ大学の大講堂を構成したのと同じ植民地主義の規範によって、分断され、裁断された偉大な歴史的記憶の小さな欠片だ」（Castillo 2008：17）

そしてそれは「空白」であり、その「空白」が存在するのは、単なるレイシズムや悪意によるのではなく、「我々自身の表象である社会、国家において、長く支配的に保持されてきた考え方」のせいだとする。こうして「空白」を考えることは、1959年の革命をまたぐキューバ史そのものを再考する

ことにつながっていく。

カスティージョによる歴史の捉え直しは、革命以降も続くキューバの国史、革命史への介入である。今まで語られてきた歴史は、「黒人、自由混血、そして奴隷たちの、キューバの社会政治史における自律した政治実践や政治知識の蓄えを捨象」しており、「奴隷制時代の黒人や混血層によって組織された反乱を、近代の解放闘争の潮流から締め出し、非道なシステムに対する突発的で組織力を欠いた蜂起であると位置づけている」と問題化するのである。そして、キューバの独立戦争を分節化する際に、「1868年に始まった出来事をのみキューバの自由への戦いとし、それ以前の植民地体制において起こったサバルタン層の闘争の経験やその経緯を等閑視している」と批判する。

これらはまったくもって、1961年に書かれながら「革命キューバ」で2005年まで、「不寛容、無理解」（岩村 2017）によって無視されてきたワルテリオ・カルボネルの『批評：国民文化はいかに生じたか』を想起させる歴史解釈であり、カスティージョも直接カルボネルを召喚している。それは「1959年に始まった革命のプロセスこそは、キューバ文化にアフリカが寄与していることの証拠だ」と断言するものだ。

「キューバの革命の力が他の革命の力より強かったのではなく、教会権力が弱く、(...) 革命がブルジョアの宗教を負かしたのではなく、それはずいぶん前からアフリカの信仰や心霊主義に負けていたのだ。(...) 教会がスペインやメキシコやコロンビアのように民衆層を動かせなかったのではなく、アフリカの宗教がこの国の労働者層の宗教生活で勝っていたのだ。(...) アフリカこそがこの国の社会変革が勝利を収めることに手を貸したのだ。(Carbonell 2005: 31)

キューバ史において「アフリカの貢献」が捨象された経緯は、「一度ブルジョアや帝国主義が倒れると、19、20世紀の革命勢力に共有された幻想、つ

まり革命のイデオロギーの想像物として、民衆というものの同質化が望まれるという事態になった」と言うのである。そこで『民衆』を物象化し非歴史化する概念を乗り越える必要があるだろう。民衆的なものとは、日々の政治的なプロセスであり、さまざまな生活の上での戦略、折衝の総体であり、そこから最も利己的で反共同体的なさまざまな『闘争』が生まれ、また新たな社会的意義や、生活の再建設、民衆知、民衆の想像的な活動がそこで醸成されているのだ」とする。革命に連なる一体化した「民衆」など存在せず、その「利己的」で「反共同体的」な闘争、「社会秩序を転覆させるような実践」が「革命指導者たちの机上の概念」とは別に、「革命的な実践」として存在したと言う。そして独立後に起こった「文化的西洋化」、フランスのユニバーサリズムの影響を受けて「黒人の統合」が起こったことを問題視する。それは、「職や教育や公共空間における人種差別に対する戦いにおいては役立ったが、文化の領域では、“上品な黒人”といったブルジョア的な完全に植民地主義的イメージを生んでしまった。そのイメージは、キューバにおけるアフリカの文化的遺産をすべて否定した」として、その一端を担ったものの中にグアルベルト・ゴメスやモルーア・デルガードまでを列挙しているのだ。「キューバの非白人による政治的、知的批判力は革命の時期に断裂していた」と断じるのである。

そして59年の革命は、「それまでなされなかった黒人の社会統合を実行した」のであり、「人種差別に対する政府の戦いではあったが、59年より前からあった人種に特化した排他的社会組織のほとんどが解体された」。これは「キューバにおける人種差別の物質的基盤や制度を解体する」流れではあったが、「10年も経たないうちに、一種の普遍平等主義の制度があらゆるアフロキューバの宗教実践者を共産主義青年同盟や党から排除し、同時にアフロキューバの社会文化的実践をフォークロア化し」てしまったと非難するのだ。「それらは消滅するべきものとして理解される傾向があった」という。そして「アバクア」は、革命キューバにおいて「犯罪的な組織として分類されて

おり、それは当時の若者たちの偏見でもあった」という。

「59年の我々の革命の軌跡」において、「革命主体の社会文化政治的な同質化をめざした実践、それは大勢の人間が同じ視点を持つことをもたらした」が、それは「革命のアクティブな政治的資源にならなかった」ために、「大衆組織の弱体化」「テクノクラート、階級組織による指揮の悪弊」が「権力の社会化を阻み、日常生活の非政治化をもたらし、社会参加を儀礼化した」と言う。そしてこう呼びかけるのだ。

「59年に約束された正義と社会的解放として、反レイシズムは、革命のプロセスにおけるこうした悪弊の影響と手を切らなくてはならない。黒人の権利を白人のそれと同じようにするのではなく、機会の平等、選択の自由、社会文化政治的複数性への権利を模索しなくてはならない。その複数性からは、革命の戦略的な目的において民衆の社会参加が行われ、同時に日常生活において、革命者の我々自身が長く受け継いでしまった支配の常識と実践を再生産していないか、議論し批判した上で、新たな文化を創造しなくてはならない」(Castillo 2008: 22-23)

このように説明される「人種」による歴史からの疎外は、その見直しによって新たな「複数性」の要求へとつながる。

「人種差別に対する戦いは、今までの政府の方針において見られたような統合を目標とすることはできない。なぜなら統合の計画は日常生活における西洋ブルジョアのヘゲモニーの自然化を前提としているからだ。私たちには古くて新しい、排他的なゲットーの復活ではなく、ブルジョアと官僚による資本主義の支配を支えてきた圧政に対し、解放的な見地を持った複数性を必要としている。」(Castillo 2008: 22-23)

として、ついには「21世紀のキューバの社会主義を再建するためには、人種的文化的混血は私たちの役に立たない。それは有害な新しいムラートのエリートによってにわかごしらえした植民地主義の病に侵された果実だ。国家による官僚主義的な、ある種の資本主義を前にして規律化され盲目的になった『人的資源』を作るための計画でもなく、『アフリカの起源』へのむなし回帰でもない、社会文化的脱植民地化」を目指すべきだとしている。

みられるように、革命史というマスター・ナラティブ、制度化された国史に抗する、民族的歴史の語り直しが行われている。

カスティージョが対抗言説を構成する対象として、おそらく想像されうるのは例えばフェルナンデス＝レタマールのような語りであろう。雑誌『カサ・デ・ラス・アメリカス』編集長の職にあって当時を代表する「前衛的」知識人であったフェルナンデス＝レタマールが1972年に著した『キャリバン—我々のアメリカの文化についてのノート—』は、90年代に先駆的ポストコロニアル批評として再読され、英語版の序文に寄せてフレドリック・ジェイムソンは「7年早く書かれたオリエンタリズム」と評した。フェルナンデス＝レタマールがそこで提示した「われわれメスティソ」は、例えばマルティを「被搾取側の良心的スポークスマン」として位置づけ、「共通の主義は被搾取側の人間とともにつくられなくてはならない」というその言葉を引き受けて次のように言う。

「征服の始めから、インディオと黒人は社会の最下層に退けられたため、被搾取側の人間による共通の主義を作ることは、インディオと黒人とともに共通の主義を作ることと同義となった。それらのインディオ、黒人は、自分たち同士、そして白人たちと混血しあい、われわれのアメリカの源たる『メスティソ』を生み出すこととなった。マルティによれば、そこでは『オーセンティックなメスティソがエキゾティックなクリオージョを征服した』のだ。」(Fernández Retamar 1972: 52)

ここでの「混ざりあう」現象は、「誰」が混ざりあうのか、主語によって強い限定を受けており、「メスティソ」はまずもって「黒人」「インディオ」が「中心」の「混血」化として想定され、そう説明されている。「われわれ」は、「決して奴隷制主張者の子孫ではなく、マンビーの子孫であり、蜂起した黒人、逃亡奴隷、独立派の子孫である」と前提化した上でのメスティソなのである。(岩村 2015: 231)

もちろん、ヨーロッパの文学的キャノンである『テンペスト』を(旧)植民地側から知＝権力の問題として再解釈するこのテキストは、当時の対米関係の緊張においても、対外的にはカウンターディスコースの生産、「帝国主義」への「抵抗」として強い説得力を持っていると言えるであろう。しかし、対内的にこうした「われわれメスティソ」のディスコースが持ちえた影響は、生物学的、発生論的、もしくは有機的実体論のもとでの「統合」として意識された可能性は否定できないのではないだろうか。もしそうであるなら、こうした想像力こそが、マリオ・カスティージョに「統合を目標とすることはできない。なぜなら統合の計画は日常生活における西洋ブルジョアのヘゲモニーの自然化を前提としているからだ」とまで言わせているのではないか。

もう一つの論点は、カスティージョの表現行為が持ちえた意味についてである。それは、雑誌論文で述べているように、奴隷に始まるアフリカ系の社会構成員による行為の、キューバ史における意味づけだけだろうか。いや、そうではあるまい。歴史の再考を促す企図の軸ともいえる出来事は、まずは「アバクア」の構成員の歴史的行為に目を向けさせることであった。ひるがえって「アバクア」とは、「19世紀中ごろ以来、スペイン当局に公的に禁止され、その儀式は常に秘密に行わなくてはならなかった」(Quiñones 1994: 16) 結社であり、そればかりか、革命後のキューバにおいても“公的”に結社の組織が追認されたのは1991年のカソリックの入党を認めた党大会時である。19世紀より違法結社に指定されたアバクアは、その「秘密

主義」に特徴づけられ、詳細な民俗学的な調査研究は歴史的には警察権力によってなされてきたほどであった（Trujillo y Monagas 1882、Roche y Monteagudo 1925 および Valera Zequeira 1984）。例えば現在も、それぞれの結社が祭儀場に持つ、構成員の許可を持つ者のみに入室を許された部屋であるとか、それぞれの儀式の内容など、場所や行為の意味を秘匿し、外部に情報を遮断している。これらはすなわち構成員ないしはその関係者以外の「外部」による理解や解釈、つまりは「それが何であるか」と言う外部の理解を拒んでいるとも言え、歴史的にも「得体の知れないもの」として継承されてきたのであろう。唯一開かれているのは、その秘匿された情報の源である想像上ないしは口承により継承される“カラバリ”の記憶や遺制ということになるが、それは認められた構成員にしか得られないものなのである。したがって、とりわけ国家権力に対してその存在ないしは理解を拒絶し、キューバのナショナルな文化のナラティブに対し得体の知れないものとして包摂されてこなかった可能性もあるのではないだろうか。

そうした法外な、権力が包摂できない文化実践だとして、もしその延長として、友愛としての蜂起が行われていたならば、この歴史的記憶の空白に注視して称揚、顕彰するのはどういう行いになるだろうか。とするとカスティージョの表現は、革命史に「黒人」の寄与を認めさせるなどということよりも、より転覆的な可能性を孕んでいるのではないだろうか。ただしそれは、言表上の行為としてではなく、彼のとった行動、表現行為が持つ行為遂行性の方途においてであろう。

2006年にこの顕彰行為を開始したカスティージョは、近年はそれに参加していないと言う（カスティージョ、高等芸術学院、2018年11月21日）。現在の表現が「自分たちが許可なく自主的に自己決定して行ったものとは変容した」からだと言う。

2019年1月、映画『イノセンシア』（アレハンドロ・ヒル監督、キューバ映画芸術産業庁制作）が完成し、ハバナ市内で上映された。「一つのシンボ

ルの誕生」(映画のトレーラーのキャプション)とする医学生銃殺という史実を、ホセ・マルティの幼馴染だったフェルミン・バルデス・ドミンゲスを狂言回しにして映画は作られている。フェルミン・バルデスは、銃殺された学生たちと同じ教室の学生であり、同様に投獄され有期刑に処されたが、8人の仲間の銃殺の16年後、彼らの無実(イノセンシア)を証明しようと戦うなかで、医学生銃殺の「隠された真実」が描写される、というストーリーである。そしてここには、カスティージョが行った表現行為のはたらきかけの結果なのだろうか、「5人のアバクア」も描かれている。監督のジルは言う。

「この映画での事件への『アバクア』の関与は、それが公的な歴史の一部になってこなかったために、口承の伝統により伝えられたものを再概念化しました。彼らの行為は、私たちの血に流れる、物量やテクノロジーの優位性を前にしてたじろがず、知性、勇気、自信、理念を常に優先すること、その見本なのです。」(Periódico Guerrillero 2019)

映画では、「5人のアバクア」が結社の儀式で密命をうけ、医学生たちを刑場に連行するボルトンリオの列に向かって丘の上から銃撃や刀剣を振りかざして急襲し、逆襲されてその場で絶命するという表現が施されている。どうやらこれは、カスティージョの表現の行為遂行性において、彼が「5人のアバクア」を歴史の「空白」から救い出しキューバ史に最文脈化したこととは異なる方向へと、その「効果」が現れている例のようである。またこの映画では、囚われた医学生が獄中で叫ぶ形で「Viva Cuba Libre」が配置されていることを付言しておく。

おわりに

本論は「はじめに」にあるように、国家や法制度に対する文化の「自律性」に着目し、権力と対峙する「対抗的発話」について考えようとした。権

威的言説への対抗言説としての発話行為の可能性について考えたかったのである。

しかし着想を得たバトラーの「対抗的発話」の議論はあらためてどうであつたろう。バトラーは、たとえば「クイア（変態）」という語の価値の変化に、「人を不快にさせる発話を逆手にとって利用したり、それを別の文脈で再演させようと」した行為の結果を見てとって、「語彙のなかに潜む可変力」、「意味づけなおしの儀式である言説がおこなう行為遂行性」の力の可能性に着目している。そして、発話行為によってもとの文脈を意味づけなおすことが可能となるには、発言時の文脈や意図と、それが生み出す効果とのあいだに、「隔たりがなければならない」とする（バトラー 2004：23-24）。しかしバトラーの論点は、人種憎悪と表現、性差別と表現をめぐるいくつかの米国での裁判に、国家権力（法権力）が「発話とふるまいの区別をうまく操る」さまを見た上で主張されている対抗言論側の「可能性」なのである。それは「法律に訴えない抵抗形態—法廷の決定を超えた文脈で発話が演じなおされ、意味づけなおされるやり方—」として捉えられている。つまり、バトラーのモデルは国家権力、法秩序に対し、自律した文化の領域で争われる発話行為、その場合の抵抗戦略の可能性に関して構想していることになる。そして、バトラーを引いた駒村が、それが行われるのが「思想の自由市場」という論理的場であると想定したのも、両者が米国と日本を対象にしている以上は当然であろう。

しかし筆者が対象にした表現行為が行われる現場であるキューバは、バトラーや駒村が舞台とする社会にある、「思想の自由市場」のあり方が異なる。「あり方が異なる」というのは、筆者がキューバにおける「思想の自由市場」の欠落形態を前提として分析することを問題視しているためだが、いずれにしろ「思想の自由市場」という抗争性のもとでの発話「同士」の議論を、表現行為が行われる現場の行為と効果、抵抗や抑圧の図式が異なる社会での発話の議論にそのまま適用させることはもちろんできないだろう。そこ

でもし適用するならば、

- ・革命のナラティブの権力性を、「意味の網」の位相で見なくてはならない
- ・対抗的発話は、それとの対峙関係、折衝において見なくてはならない
- ・そもそも「対抗的発話」が、キューバ社会のこういった社会的位置からどこへアドレスされているのか、社会構成の相違からも検証しなくてはならない
- ・「発話行為」「意味づけなおし」「それが生み出す効果」のいずれをも、その言説が構成される場の相違について見なくてはならない。例えば情報インフラの違いを見てもそれは明らかである。

といった観点が不可避と思われる。が、いずれも具体例をもって分析を深めることはできなかったし、「ラップの表現行為」の例に関しては米国政府の介入という「特殊な」外形的事実に終始してしまい、着目していた発話行為の可能性、修辞的力、単語の脱文脈化、再配置、流用、領有、意味の不安定化、様々な可能態のもとに行われる言葉の働きかけ、「行為遂行的発話行為」等々、無数の課題を残すことになった。

また、一部重なることではあるが、筆者は、キューバの文化の自律性とその抗争性を、個人の発話行為と権力との関係性に見ようとし、つまりは抑圧的状况でいかに自律した文化表現が個人に可能かを考えようとした。しかしここには、個人の文化的自律性をあらかじめ「評価」する、他者の表象＝代表という筆者の行為の別の問題性が横たわっている。異なる文化の自律的な、権力への対抗可能性を描く行為は、やはり、誰が、なぜ、どこに向けて他者の文化的固有性を描き、価値づけし、発信するのかという、知の権力性という観点からの審問を受けることになるだろう。少なくともこうした問いに対し、緊張関係を維持しながら研究は進められるべきであるが、感得できる結果になっているかは現在では疑わしい。これも次なる課題としたい。

注

- (1) 「キューバに対する破壊行為や組織的中傷キャンペーンについて情報共有する空間」を目的とし、「反テロリズムのキューバ人ジャーナリスト」と他国のジャーナリストによって共同編集されるウェブページ。
- (2) 2019年現在はその目的として「場所や内容に関わらず、キューバ人のあらゆるアーティストの作品を見て語る」計画を掲げており、「人々はアートを通じて自己表現をするのであるから、キューバでは反体制芸術が優勢なのであり、それは芸術的才能の真実の潮流であって、それゆえに通信社の AP は明らかにキューバのゲシュタポの情報と利益からこのサイトを中傷したのだ」としている。(タレント・クバーノ・ネット 2019)
- (3) 2009年にパキスタンの「Humari Awaz」ソーシャル・ネットワーク計画を請け負ってヒラリー・クリントン国務長官(当時)から賞を贈られた。(モバイル・アコード 2009)
- (4) キューバ政府によるインターネット上の情報アーカイブサイト。

参考文献

- AP 通信 “Cuban hiphop documents” 2014 (閲覧日 2019-11-02)
<https://www.documentcloud.org/documents/1374655-cuban-hip-hop-documents.html>
- Capote, Raúl 「ロス・アルデアノス、USAID、そして反キューバ計画」 2017 (閲覧日 2019-11-02)
<https://cubaenresumen.wordpress.com/2017/12/27/los-aldeanos-la-usaid-y-los-planes-contra-cuba/>
- Carbonell, Walterio (2005) *Cómo surgió la cultura nacional*, La Habana, Biblioteca Nacional de José Martí [1961].
- Castillo, Mario (2008) “Los ñáñigos y los sucesos del 27 de noviembre de 1871: memoria histórica, dinámicas populares y proyecto socialista en Cuba,” *Camino*, no.47, enero-marzo de 2008, pp. 15-22.
- CUBADEBATE “EEUU utilizó a raperos para cambio de régimen en Cuba: Investigación de AP” 2014.4.7 (閲覧日 2019-11-02)
<http://www.cubadebate.cu/noticias/2014/12/11/eeuu-pago-a-raperos-cubanos-para-cambio-de-regimen-en-cuba-impresionante-investigacion-de-ap/#.XM5MeI4zZhE>
- EcuRed 「ロス・サフィーロス」 n.d. (閲覧日 2019-11-02)
https://www.ecured.cu/Los_Zafiros

- Fernández Retamar, Roberto (1971) “Caliban,” *Casa de las Américas*, No. 68, pp. 124–51.
- (1972) *Calibán: Apuntes sobre la cultura de nuestra América*, México D. F., Editorial Diógenes.
- Los Aldeanos “Los Aldeanos en Rotilla 2010” 2011 (閲覧日 2019-11-02)
<https://www.youtube.com/watch?v=17iyRMFhgXI>
- NHK BS 「キューバ・リブレ ラップで闘う」 2018 (閲覧日 2019-11-02)
<http://www6.nhk.or.jp/wdoc/backnumber/detail/?pid=180810>
- Office of Inspector General “Review of USAID’s Cuban Civil Society Support Program” 2015 (閲覧日 2019-11-02)
<https://oig.usaid.gov/sites/default/files/2018-06/9-000-16-001-s.pdf>
- Periódico Guerrillero “Inocencia: una película salida del corazón” 2019 (閲覧日 2019-11-02)
<http://www.guerrillero.cu/cultura/5807-inocencia-una-pelicula-salida-del-corazon.html>
- Quiñones, Tato (1994) *Ecorie Abakuá*, Ediciones Unión.
- (1998) “Historia y tradición oral en los sucesos del 27 de noviembre de 1871”, *La Gaceta de Cuba* . no.5, septiembre de 1998, pp. 24–26.
- Roche y Monteagudo, Rafael (1925) *La policía y sus misterios en Cuba: con un prólogo del eminente criminalista Dr. Felipe González Sarraín*, Havana, La moderna poesía, [1908].
- Trujillo y Monagas, José (1882) *Los criminales de Cuba y d. José Trujillo, narración de los servicios prestados en el cuerpo de policía de la Habana, por d. José Trujillo y Monagas ... y la historia de los criminales presos por él, en las diferentes épocas de los distintos empleos que ha desempeñado hasta el 31 de diciembre de 1881*, Barcelona, Tip. de F. Giro.
- Valera Zequeira, Eduardo (1894) *La Policía de La Habana (Cuebas y Sabaté)*, La Habana, Imprenta y Papelería “La Universal”.
- Zamora, Alejandro (2017) *Rapear una cuba utópica*, La Habana, Editorial Guantanamera.
- 有國明弘 (2018) 「ストリートダンスの日本における展開——ダンス必修化をめぐる国内の動向に着目して——」 <研究ノート> 『市大社会学』015、2018年3月、39–59頁。
- 岩村健二郎 (2015) 「ある文化的自己同一性の主張—フェルナンデス＝レタマールの“キャリバニズム”—」 『人文論集 (53)』2015年2月、240–205頁。

—— (2017)「現代キューバにおける『人種』と『歴史』—有色人独立党の反乱 (1912) を巡って—」『人文論集 (55)』2017年2月、248-221頁。

キューバ ホセ・マルティ国立図書館 「ヒップホップの最初の資料的展示」 2018 (閲覧日 2019-11-02)

<http://200.0.27.252/?secc=noticias&idNews=1383>

クリエイティブ・アソシエイツ・インターナショナル「ミッション」2019 (閲覧日 2019-11-02)

<https://www.creativeassociatesinternational.com/mission-vision-values/>

駒村圭吾 (2018)「言葉・意味・権力：トランプの場合、天皇の場合」『法學研究：法律・政治・社会』91巻1号、慶應義塾大学法学研究会、21-48頁。

小山昌宏 (2002)「快楽の前に懺悔するサブカルチャー 4 ポピュラーからポップそしてレイブへ」『サブカルポップマガジンまぐま』(9)、蒼天社。(参照 2019-11-02)

<http://www1.odn.ne.jp/~ccu48870/popura.htm>

新藤通弘 (2018)「ドキュメンタリー映画、『キューバ・リブ レラップで闘う』 原題：『自由キューバ万歳—ラップは戦争だ—』」(参照 2019-05-04)

<http://estudio-cuba.cocolog-nifty.com/blog/files/18.09.04%20自由キューバ万歳—ラップは戦争だ—.pdf>

タレント・クバーノ・ネット 「このサイトとは」 2019 (閲覧日 2019-11-02)

<http://www.talentocubano.net/home.html>

バトラー、ジュディス (2004) (竹村和子訳)『触発する言葉 言語・権力・行為体』岩波書店。

フンダシオン・オペラシオン・ガヤ・インターナショナル 「報道ステイトメント」 2014 (閲覧日 2019-11-02)

<https://pasoapasoporlapaz.wordpress.com/2014/08/07/operation-gaya-international-foundation-fundaogi-official-statement/>

モバイル・アコード ブログ 「オバマ大統領とクリントン長官がモバイル・アコード社提供によってモバイル・ビデオ・メッセージをアフガニスタンとパキスタンの人々に送る」 2009 (閲覧日 2019-11-02)

<https://mobileaccord.wordpress.com/2009/12/09/president-obama-and-secretary-clinton-broadcast-mobile-video-messages-to-the-people-of-afghanistan-and-pakistan-powered-by-mobile-accord/>

毛利嘉孝 (2007)『ポピュラー音楽と資本主義』セリカ書房。